



とある城の朝

ビーイングキャッスル

ここは、ストレンジャー達の住んでいるテトラクリスタルアイランドから遠く離れたお城『ビーイングキャッスル』

周りは海で、徒歩で外へ歩き出すことは不可能とされる崖の上の古いお城。

朝日は昇らず、一日ずっと暗い雲に覆われている。

そんなお城の中で生活するのが、種族がバラバラの方々。

「おっそうじ、おっそうじ、スイスイスイっと。」

城内のとある通路をモップ片手に掃除するのが、お城に使える使用人であるメイドトカゲ。朝早くからお城を綺麗にするため、掃除用具を片手にお城の中を駆け巡る。

「・・・ふう、こんなかな。」

メイドトカゲはモップをバケツに入れ、掃除した廊下を見た。

光が微量でも床が輝いているため、綺麗なのが一目瞭然だ。

「次の所に行かないと。 よいしょ。」

メイドトカゲは木製のバケツとモップを持ち、別の場所へ向かって歩いていった。

「さあさあ急いで！ もうすぐ朝食の時間になるわよ！」

一方お城の地下では、大勢のメイドトカゲ達が料理器具片手に朝食を用意していた。

住んでいるご主人のためにも、美味しい料理を作っていた。

厨房では一人のメイドトカゲが指揮を取っていた。

「パンの用意は！」

「出来立てが出来ていますー」

「スープの用意は！」

「盛り付けを終えるだけですー」

「前菜の用意は！」

「すでに完了してますー」

「よろしい！」

完璧な指示と行動で、すでに料理は完成。

「では皆さんのお料理を用意してちょうだい。私をご主人様を起こしてくるわ。」

指揮を取っていたメイド長は厨房を離れ、階段を上っていった。

ビーイングキャッスルに使える、使用人達であるメイドトカゲ軍団。

そのメイド達を指示しているメイド長が、ティザー・ヒール。

全メイド達が信頼する、頼れるメイド長だ。

しばらく長い螺旋階段を上り、通路を走らずに歩いていく。

誰も見ていないのはお構いなしで、いつも清楚に生活することを義務付けられているのだ。

そして一つの扉の前にやってきた。

扉には二人のナイトトカゲ達が立っていた。

「起床のご挨拶に参りました。」

ティザーがそう言うとナイト達は横にずれ、扉を開けた。

部屋にはベットとクローゼットなど、必要最低限の物のみが置かれていた。

ベットの上には、一つの人影がスヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

ティザーは物音を立てないようにそばへ近づき、寝ている主人を起こした。

「ホープ様、朝でございます。」

ティザーはそう言うと、寝ている主人の肩に手を置き、優しく揺すった。

「ん。 もう朝か。」

ホープと呼ばれた主人は、ベットから起き上がり、ティザーを見た。

「はい。 もう朝でございます。」

「わかった。 仕度をしたら食堂へ行くから、他の方達を起こしてきてくれ。」

「わかりました。」

ホープはティザーに命じると、ティザーは部屋をあとにし、別の部屋へ向かって行った。ベットから立ち上がり、ホープは体を伸ばしつつシャワーを浴びに行った。

ホープを起こしたティザーは、次の主人の下へ向かっていた。ホープがいた部屋からそこまで距離が無いため、すぐに到着した。部屋の前にはホープ同様に門番のナイトトカゲが立っていた。

「起床のご挨拶に参りました。」

ティザーはそう言うと、ナイト達は横にずれ、扉を開けた。

その部屋は桃色を主体とした非常にファンシーな部屋だった。家具のほかにも、女の子らしいグッツが置かれていた。主人の寝ているベットは普通の物では無く、花を象ったようなベットに寝ていた。

「ホネスティ様、朝でございます。」

ホープ同様にティザーは声をかけ、寝ている主人の肩を軽く揺すった。

「うーん。 もう朝？」

「さようでございます。」

ティザーは主人の問いかけに答えた。ホネスティと呼ばれた主人はベットから起き、体を伸ばした。

「毎朝ありがとう。 今度はあの方を起こしてきてください。」

「わかりました。」

ホネスティはベットについている階段から降りつつ、ティザーに命じた。

ティザーはすぐに部屋を離れ、別の場所へ向かって行った。

ホネスティは顔を洗いに洗面所へ向かって行った。

二人を起こしたティザーは同じペースで廊下を渡り、階段を上って行った。

長い階段を上っていくと、最上階に到着した。

その扉は頑丈な作りで門番のナイト達も普通の場所とは違い、4人立っていた。

「起床のご挨拶に参りました。」

ティザーはナイト達に丁寧に挨拶をした。

ナイト達は大きな扉を4人がかりで開き、ティザーは中へ入っていった。

その部屋は白をメインとした清潔感あふれる上品な部屋で、少ない日差しの差し込む大きな窓があった。

ティザーは主人の寝ている白いベットの元へ。

「チェリー様。 朝でございます。」

ティザーは丁寧な動作と口調で主人を起こした。

「う、うーん。」

チェリーと呼ばれた主人はベットから起き上がった。

「もう朝なのね。」

「はい。 ご朝食の準備も整っております。」

「わかったわ。」

チェリーはベットから床へ下りた。

「仕度をするから廊下で待っててもらえるかしら。」

「わかりました。」

ティザーはすぐに下がり、廊下へでると共に扉も閉まった。
チェリーはその後着ていた服を着替え、顔を洗い、少々乱れていた髪をセットした。
服は桜色のワンピースで、白のリボンをつけた。

そして部屋を出た。

「お待たせしました。」

「では、食堂の方へご案内いたします。」

ティザーはチェリーの先導を立ち、食堂へ向かって行った。

「おはようございます、アリス様。」

「おはようございます。アリス様。」

「おはよう、ホープさん。ホネスティさん。」

食堂へ向かう道はホープとホネスティの部屋の前を通るため、二人もいっしょに歩いていく。
この城に住んでいる主人はこの3人。
ほかには使用人であるリザードマンナイト達とリザードマンメイド達しかいない。
大きな城であるにも関わらず、住んでいる人は少ないのだ。

チェリーの右を歩く黄色い肌をした獣は、ホープ・ザ・エレクトリクリイ
雷を操る雷獣一族の青年。

その反対の左を歩くのは茶色い肌をした小さいリスは、ホネスティ・カメラア
澄んだ声の持ち主の妖精だ。

そして二人の間を歩くのがこの城の主。 チェリー・アリス・ブロッサム。 二人からはアリス

と呼ばれる少女だ。

特に変わった所を持たない、金髪のセミロングヘアーでアメジストの色をした瞳を持つ、桜色の服を着た普通の少女だ。

だが城に住む者たち全員が認める主、マスターなのだ。

そんな三人の主人と共に、ティザーは食堂へ向かって歩いて行った。

ビーイングキャッスル

「御馳走様でした。」

ティザーと共に食堂へ来た三人は、朝食を済ませた。

メイド達は3人が座っていた席を少し後ろへずらし、主人達が立ち上がった。

3人が立つと、メイド達は主人達が食事に使用していた食器類を片し始めた。

「今日のもとても美味しかったわ。」

チェリーは席を立ち、近くのメイドに言った。

「ありがとうございます。」

メイド達は食器を回収すると、お辞儀をし、速やかに席を外した。

「今日はどうされますか？ アリス様。」

ホネスティは窓辺にいたチェリーに向かって問いかけた。

「そうね。今日は一人でお部屋にいることにするわ。2人は好きなように過ごしてちょうだい。」

「わかりました。」

チェリーにそう言われると、二人は食堂をあとにし、別行動を取り始めた。

食堂に一人となったチェリーは、自室へ戻っていった。

2人と別れたホープは塔の屋上を目指して進んでいた。

雷獣であるホープは時々暇を貰うと、屋上から空へ移動し電気での人助けをしているのだ。

そして塔の最上階。

「うーん。 海風が涼しいな。」

ホープは塔の上に吹く海風を体を感じつつ、空を見ていた。

今日も少しどんよりとした雲行で、太陽が見えなかった。

ホープはそんな雲を見終えると、その場で大きく跳躍し、雲の間を抜け、雲の上へと移動した。

そして雲の上を走ってどこかへ向かって行った。

一方、ホネスティは中庭にいた。

中庭には小さな花畑があり、ホネスティはその中に座り花冠を作っていた。

「綺麗な綺麗な花冠。 出来るかなー」

ホネスティは軽い歌を歌いつつ花冠を作っていた。

遠目から見ると、花に埋もれるリスの姿はかわいらしいものである。

ナイトトカゲ達とメイドトカゲ達かというと

主人が食事に使っていた食器を片付けつつ、朝食を食べていた。

食べる暇は余り無いため、一日二回ほどのご飯である。

会話をしつつ楽しい一時を過ごしているが、手を止めないように食べていた。

そして一人自室へ戻っていったチェリーかというと

♪～♪♪～♪～

自室でピアノを弾いていた。

白い部屋にあうように、部屋には白いグランドピアノが置かれており、そのピアノを一人で弾いていた。

楽譜は特に無いが、とても綺麗な曲を奏で歌っていた。

各自でそれぞれの行動をし、毎日を過ごしていた。

だが特に変わったことも無い上に、城は海で囲まれているため、外にも出られず、いつも城の中

。

チェリーはそんな毎日に少々あきているが、そのことを忘れるため、気分を紛らわすために、こうしてピアノを奏でているのかもしれない。

そんなチェリーの元へやってきたのがホープとホネスティ。

二人との出会いはバラバラだが、とあるきっかけがあったため二人はいっしょに城で住んでいるのだ。

時に中庭で出会い、時には城の中で出会い。

二人はその時の恩義もあるが、本当に仲良くなりたい、守りたいがためにいっしょにいるのだ。

チェリーの能力を知って。

少女と雷獣

ホープとホネスティがチェリーと出会う前のビーイングキャッスル。
今も昔も、城は薄暗く、荒波が外壁に当たっている毎日。
そんな日を毎日、チェリーは1日中ずっと、城で過ごしていた。
とある日、チェリーは中庭でホープと、ホネスティとは城の内部で出会った。

ホープはその時重傷を負っており、全身傷だらけで倒れていた。

『くそっ、俺としたことが・・・』

ホープは薄れゆく意識を正気に保ちつつ、城の中庭に倒れていた。
全身は傷だらけ、衣服は余り原型を留めておらず、布に近い状態でボロボロだった。
その時たまたま通りかかったチェリーは、ホープを見つけると、ホープの下へやってきた。

『だ れだ？』

「あの、大丈夫ですか！？」

全身傷だらけのホープを見つつ、チェリーは問いかけた。

「ああ、な んとかな。」

「今手当てしますから、誰か！」

チェリーはそう言うと、近くにいたナイトがやってきた。

「この方の手当てを。」

「ハッ！」

チェリーに命じられ、ナイト達はホープを診療所へ運び、メイドに手当てをさせた。
手当てをされたホープはその後数日間眠り続け、傷を癒していった。

そしてある日。

「う、うーん。」

ホープは朝日と共に目を覚ました。
その時に寝ていた部屋が、今現在ホープが寝泊りしている部屋だった。

「こ、ここは・・・」

目を覚ましたホープは体を起こし、部屋を見渡した。
ホープはベットに寝ており、全身は至る所に包帯が巻かれていた。
服は身に着けておらず、靴はベットのそばに置いてあった。
ホープが部屋を見渡していると、

コンコンッ

部屋の扉からノックをする音が。

「はい。」

ホープが返事をする、1人のメイドが入ってきた。

「お目覚めになりましたか？」

「あ、はい。」

メイドはホープに声をかけつつベットへ近づいて来た。

「お体は大丈夫でしょうか？」

「はい、おかげさまで傷は塞がりました。」

ホープは全身の傷を見つつメイドに言った。

「身に着けていた衣服は破けておられましたので、勝手ながら繕わせていただきました。 ち

らに置いておきます。」

メイドは持っていた服と手袋をベッドの近くのテーブルに置いた。

「ありがとうございます。」

「それでは。」

メイドはホープに一礼すると、部屋をあとにした。

メイドが去ると、ホープはメイドが持ってきた自分の衣服を見た。

意識を失う時に身につけていた衣服はほぼ布に近い状態だったにもかかわらず、縫い目は目立たない程度にきちんと繕ってあった。

ホープは包帯を巻いたままの体に、服と手袋を身に付け靴を履き、部屋を出た。

そこはどこかの城の通路だった。

「お目覚めになられたのですか？」

ホープが通路を見渡していると、右から声がした。

そこには、今とあまり変わらない姿のチェリーとティザーが立っていた。

「あなたは？」

「この城の主、チェリー・アリス・ブロッサムと言います。 貴方は城の中庭に倒れていらしたのですが、大丈夫でしょうか？」

「はい、おかげさまで楽になりました。」

ホープは包帯を巻いたままの体を動かしつつチェリーに言った。

「よかった。」

「まだお礼を言ってませんでしたね。 自分はホープ・ザ・エレクトリクリィと言います。 助けていただき、ありがとうございました。」

ホープは丁寧な口調でチェリーに言った。

「いえ。 体に異常のある方を頼って置くことなど出来ませんから。 御気に目去らないで下さい。」

チェリーは控えめにホープへ言った。

「これから朝食なのですが、ホープさんもいっしょにどうですか？」

「いいのですか？」

「ええ、もちろんです。」

「では、そうさせていただきます。」

ホープはチェリーとティザーと共に食堂へ向かって行った。

そして食事を終え、食堂にはチェリーとホープ二人だけになった。

「それで、ホープさんでしたっけ？」

「はい。」

「あのような状態で、中庭に倒れていらしたのは、なぜですか？」

チェリーは食後の紅茶を飲みつつホープへ問いかけた。

ホープも同様に紅茶を飲んでいた。

「それを説明する前に、まず自分の事を説明してよろしいですか？」

「ええ、いいですわ。」

ホープはカップをソーサーの上に置き、チェリーを見た。

「自分は、普通の獣とは違います。 一般的には雷獣と呼ばれています。」

「雷獣、それは雷をすべる獣の事でしょうか。」

「そうです。 自分は雲より上の世界で駆け回り、雷と共に過ごしていました。 ですがとある日、少々厄介な出来事に巻き込まれて。」

ホープは少々顔を俯きつつ言った。

「なぜ争いが起こったのかは自分にもわかりません。自分にも危害が及び、戦わざるえなくなつたのです。」

「それで、中庭に。」

「はい、少々深手を負いまして。足場が無くなりそのまま下へ。」

二人は再び紅茶を口に運んだ。

「では、また天空へ向かわれるのですか？」

チェリーはホープからの話を聞き、ホープに問いかけた。

「様子を見る事もありますが、まだ戦いが起こっていれば戦わなければなりませんから。」

「それでは、貴方を天空へ送らせるわけには行きませんか。」

チェリーはホープを見つつ言った。

「なぜですか？」

「戦いなど好き好んでさせるわけには行きません。また傷を負わなければいけないのですから。たとえそれが定めであっても。」

「ではどうするんですか？」

「私に少し考えがあります。いっしょに来ていただけますか？」

チェリーはそう言うと席を立ち、ホープの下へ来た。

「はい。」

ホープは素直に聞き入れ、チェリーのあとを付いていった。

二人が向かった先は、チェリーの部屋だった。

扉の前にはナイト達が立っていた。

「扉をお開けなさい。」

チェリーはそう言うとナイト達は素早く行動し、扉を開けた。

「さあ、どうぞ。」

チェリーはホープにそう言うと、部屋へ入っていった。

ホープもあとに続いて入っていった。

二人が部屋に入ると、扉は閉められた。

「あの、ここは？」

「私の部屋です。 とりあえずテラスへ。」

チェリーはテラスへの窓を開けつつ言った。

二人がテラスへ出ると、外は薄暗い雲に覆われた海が広がっていた。

だが城の上空は綺麗な青空が広がっていた。

チェリーは少し前へ出ると、胸の前で祈るような感じで手を組み、目を閉じた。

『何をする気なんだ？』

ホープは後方で静かにチェリーの行動を見ていた。

しばらくすると、暖かい風が城に吹いてきた。

チェリーの髪やホープの服が風にあおられ、なびいていた。

その後チェリーは目を開けながら手を広げた。

ブワッ！！

すると先ほどよりも強い風が二人の前方から城に吹いてきた。

『なんだ！？』

立っていた位置から飛びそうになり、ホープは必死に足に力を入れた。

チェリーはそんな強風の中で変わらずにその場に立っていた。

風はしばらくすると止み、穏やかになった。

「あの、何をしたんですか？」

ホープは体制を直しつつチェリーに問いかけた。

「たいしたことはしていません。 ちょっと風を呼んだだけです。」

「風を？」

「ええ、祈りを風に乗せて天空へ吹いてもらったんです。 コレで争いは治まると思います。」

チェリーはホープの方へ振り返りつつ言った。

『祈りを風に乗せて飛ばしたのか。 すごい力を持っているんだな、この少女。』

ホープはそう思いつつチェリーを見ていた。

「ためしに天空へ上がって、見てきても構いませんよ。」

「そうだな。 ではそうさせてもらいます。」

ホープはそう言うと、テラスから天空へ目指して跳んで行った。

チェリーはホープの姿が見えなくなるまで空を見ていた。

その後ホープが空から降りてきた。

「どうでしたか？」

テラスに再び足をつけたホープにチェリーは問いかけた。

「ああ、とても平和になっていた。 すごい力を持っていたんですね。」

「それほどのことはしていません。 本当にただ、祈っただけです。」

チェリーは笑顔でホープにそう言った。

「ところでホープさん。 これからの行く先の予定はありますか？」

チェリーはホープに問いかけた。

「いや、特に無いが。」

「でしたら、城に住みませんか？」

「そんな事していいのでしょうか。」

「もちろんです。 私一人では少々寂しかったので。」

チェリーは表情は変えずにホープへ言った。

『ナイト達やメイド達はいるが、寂しい暮らしをしていたのか・・・ それに。』

ホープはチェリーを見つつ思った。

『こんなすごい力を持っているんだ。 危険は付き物なのかもしれないしな。』

「構いません。 むしろこちらからもお願いしてもいいでしょうか？」

「もちろんです。」

「それでは、今後ともよろしくお願ひします。 アリス様。」

「こちらこそ、ホープさん。」

二人はテラスで握手をした。

その後、ホープは手当てをしてもらった部屋に住み、チェリーのそばに付いたのであった。

少女とリス

ビーイングキャッスル

中庭でホープと出会って数日後。

城での生活にもなれ、傷が完治したホープはいつもと同じく、チェリーと共に食事を取っていた。

「ホープさん、今日はいかがなさいますか？」

食事を終え紅茶を飲んでいたチェリーは向かい側に座っているホープへ問いかけた。

「今日も城の散策をしようと思ってます。 広くてなかなかすべての場所まで目が行き届かなくて。」

「では私も一緒してもいいかしら？」

「もちろん、いえこちらからもお願いしてもいいですか？」

「はい。 喜んで。」

チェリーは笑顔で言った。

『あの時以来、アリス様の表情が明るくなったな。』

ホープは紅茶を飲みつつチェリーの顔を見ていた。

最近の彼女はご機嫌で、とても楽しそうな顔をしていた。

その後二人は食堂を後にし、同階の城の部分を探検し始めた。

日差しは余り無いもののそこまで暗くないため、明かりは入らなかった。

「ここは、倉庫ですね。」

チェリーは近くにあった扉を開け、二人は部屋へ入った。

そこにはいろいろな道具が置いており、武器倉庫もかねているようだった。

「たくさん武器があるんですね。」

「ええ、以前からずっとあるんですが、利用価値は無いんです。」

「平和が一番ですからね。」

ホープは置いてある道具を一通り見つつ言った。

『花瓶や絵もあるな。昔はギャラリーや何かだったのかな。』

「あら？」

ホープが花瓶を見ていると不意に後方から声がした。

声がしたほうを見ると、チェリーが何かを見ていた。

「アリス様。 何がありましたか？」

ホープはチェリーが見ていた物を見た。

そこには干乾びた花があった。

「枯れた花、みたいですね。」

「花瓶か何かにいけてあった物でしょうか。 でもまだ枯れたばかりの花みたいですね。 芯がまだしっかりしてます。」

チェリーは花を触りつつ言った。

すると、チェリーは近くにあった細長い花瓶に花を入れた。

「どうするんですか？」

「水を入れて様子を見てみようかと。 まだ枯れたばかりなら元に戻ると思いますから。」

「それはいい考えですね。」

二人は搜索を一回止め、チェリーの自室へ戻っていった。

部屋へ戻ると、チェリーは早速花瓶に水を入れた。

「どんな色の花だったんでしょうか。」

「枯れ色具合だと、明るい色みたいですね。」

ホープとチェリーは水の入った花瓶に入れた花を見つつそう言った。

すると、

ズワッ！

枯れていた花が、一気に花瓶に入っていた水を吸い上げる音がした。

「？」

「何か音がしましたね。」

二人は花を一回外へ出し、花瓶の中を見た。

すると中には今入れたばかりの水が消えていた。

「吸い上げた、みたいですね。」

「そのようで。」

「ちょ、ちょっとー」

二人が会話をしていると、不意に声がした。

「え？」

「どこですか??」

「ここよー」

声はチェリーの手元からしていた。

二人は声がした方を見ると、そこにはチェリーに握られたリスがいた。

「あ、あら？ 私今まで花を持っていたはずなのに。」

「いつの間にリスにすり変わったんだ？」

「その花が私なのよ、とりあえず離して〜」

リスはチェリーの手の中で抜け出そうと必死になっていた。

「あ、ごめんなさい。」

チェリーはリスに謝りつつ手を離れた。

リスは手から離れると床に降り立ち、チェリー達の目線に合うように花瓶の乗った台の上に素早く上がった。

「あの、貴方は？」

「それを言う前にまずお礼を言わせて下さい。 助けてくださってありがとうございます。 私はホネスティ・カメラアと言います。」

「ホネスティさんね。 どういたしまして。」

チェリーはホネスティからお礼を言われ、応答した。

「でもお前、何で枯れた花の姿をしてたんだ？」

「私は貴方の様な種族の言い方をすると、『カハク』っていうの。 乾燥しすぎると、私は干乾びちゃうの。 で、水分を得るとまた元の姿に戻るの。」

ホネスティは一通り自分の紹介を二人にした。

「そうだったんですか。 でもなぜこの城に？」

「ちょっと旅をしていたら喉が渴いて。 で、城をさ迷っていたら干乾びて花になってたの。」

「ずいぶんと大変そうだな。」

「でも美味しい水を飲めて良かったわ。 飲めなかったらずっと干乾びていたままだったから。」

ホネスティはうれしそうに言った。

「それでホネスティさん。 これからどうするんですか？」

「そうね。 特に行き先は決まってないわ。」

「良ければこの城でいっしょに過ごしませんか？」

チェリーは控えめにホネスティに言った。

するとしばらくホネスティは考え、言った。

「・・・この城って。」

「はい。」

「お花畑。 ある？」

「え、ええ。 中庭にありますよ。」

チェリーは素直に答えた。

「いいわ。 ここで住む。」

するとホネスティは即答した。

「ありがとうございます。」

『単純な奴だな・・・』

ホープはそう思いつつホネスティを見ていた。

そして、ホネスティのために新しい部屋を用意し、彼女好みの部屋を用意させた。

そんな単純でもあった出会いをして、ホープとホネスティはいっしょに住み始めたのであった。

ビーイングキャッスル

しばしの時間が過ぎ、夜。

城の住人達はすでに職務を終え、就寝していた。

ナイトトカゲ達は交代で部屋の見張りをし、メイドトカゲ達はディナー時の食器等を片付け終わると、それぞれの就寝部屋へと移動していた。

ホープは部屋に戻るとベットを直し、あくびをしつつベットへ入り寝てしまった。

ホネスティも同様にベットを直し、部屋にあった適当なぬいぐるみを一つ取り、いっしょにベットへ入り寝てしまった。

チェリーはというと、着ていた服を脱ぎ別の服へ着替え、ベットへ入り寝てしまった。

それぞれが別の行動を取っているものの、皆が皆、夢の国へと出かけて行った。

城の外では波が落ち着き、静かな時間がやってきた。

と思えた。

「ウフフ、ずいぶんとのんきな方々が住んでるのね。」

「ああ、あんなザコ共なんかといっしょに住んでるが、間違っているぐらいにな。」

城周辺の海の上では、二人の影が話をしていた。

暗い雲に覆われ、月明かりが少ないため、はっきりとした形はわからない。

「では、のちほどおいしいメインディッシュを頂きに来ましょうか。」

「せいぜい、楽しませてくれよな。」

二人はそれぞれコメントを述べると、どこかへ向かって飛んで行った。

暗い夜が終わって、朝。

城にいつもの朝がやってきた。

メイドトカゲ達は早起きをし、職務活動を開始した。

ナイトトカゲ達は夜間の見張りの交代をし、仮眠を取りに行った。

ティザーは昨日同様に、主人であるホープ、ホネスティ、チェリーを起こして食堂へ向かっていた。

「ご馳走様でした。」

「ご馳走様。」

三人は食事を終え、席を立った。

「今日も天気が悪いですね。」

「昨日よりちょっと薄暗い気がするな。」

チェリーとホープは窓から外の景色を見つつ言った。

今日も海の上は曇り空。 日差しが少なかった。

三人が食堂で平和な時間を過ごしていると。

バタバタバタッ！！

普段は聞かない、廊下から誰かが走ってくる音がした。

バンッ！

そして食堂の入り口が勢い良く開けられた。

「大変です！！ チェリー様！！」

入ってきたのは一人のナイトトカゲだった。

だが普通のナイトトカゲでは無く、ナイト軍団の隊長、プレスル・ザ・リザードだった。

「何事ですか？」

「侵入者と思われる大群がこちらに接近しています！！」

プレスルは少々息切れをしていたが、要件を主人達に伝えた。

「侵入者！？」

「いけませんね。」

チェリーはそう言うと、食堂から飛び出し、高台へ向かって移動していった。

「あ！ アリス様！」

「お待ち下さい！」

ホープとホネスティも急いでチェリーの後を追って行った。

プレスルも同様に3人の後を追いかけて行った。

チェリーは食堂の近くの高台へ移動すると、辺りを見渡した。

「厄介なことが起こりそうね。」

城の前方から黒い塊が城を目指してやってくるのが見えた。

チェリーより数秒遅れてホープ達も到着した。

「うわあ、すごい大群・・・」

ホネスティはこちらにやってくる大群を見つつ言った。

「アリス様。 いかがなさいますか？」

ホープは大群の確認をした後、チェリーに問いかけた。

「争い事はしたくは無いのですが、相手が手を出してくるとすればこちらも戦わずにはいられません。」

「！！ チェリー様！！」

チェリーが話をしていると、城の上空からやってきた突撃隊の一人ががチェリーに襲い掛かった。

プレスルは身に着けていた剣を引き抜き、攻撃を受け止めた。

「早く！ チェリー様を安全な所へ！！」

プレスルは相手の攻撃を受け止めたままホープとホネスティに言った。

「仕方ない。 行きますよアリス様！」

ホープはチェリーをお姫様抱っこし、高台を後にした。

攻撃を受け止めていたプレスルは相手の攻撃を払い、城内に響くよう息を吸い込み、大声で言い放った。

『緊急事態発生！！ 敵の大群の進行を阻止し、ご主人様達をお守りするのだ！！』

場内にいた他のナイト&メイド達は知らせを聞き、職務を置き戦闘体制へ。それぞれが武器を手にし、進入してくる敵の大群に立ち向かって行った。

チェリー達の近くにいたナイト達はその先頭と後に立ち、護衛体制に入った。

「ウフフ、さあ。 ショータイムの始まりよ！！！」

「お前達！ アリスを捕まえるのだ！！！」

敵の親玉の二人は手下に命じると、次々と敵を城内に送り込んだ。

ホープはチェリーを抱いたまま、城内を駆け回っていた。

だがどこへ行けばいいのか行くあても無く、闇雲に逃げ回っていた。

「！ 敵が来たわ！」

チェリーは自分を抱いているホープに向かっていった。

「チッ、戦うしかないのか！」

ホープは一時チェリーを降ろし、自分の背に立たせた。

ホネスティも同様にホープとは逆の方へ立ち、チェリーを守る体制に。

敵はチェリーを見つけると、捕獲すべく襲い掛かってきた。

「主人に手出しはさせない！！」

三人と敵の間に立っていたリザードナイトは剣を引き抜き、敵へ向かって行った。

ガッシャーン！！

「！ 後ろからも来たわ！」

ホネスティがそう言うと、前方からも敵が窓を壊し進入してきた。

「邪魔者は消えてください！！」

近くにいたりザードメイド達が箒やモップを片手に敵に向かって行った。
もちろんただの箒やモップでは無く、仕込み武器である。

前方後方と敵に囲まれ、三人は囲まれてしまった。

「早くチェリー様を！」

「お願いします！」

リザードナイト&メイド達は口々にそう言うと、三人のために敵を払い、道を作った。

「アリス様、行きますよ！！」

ホープは再びチェリーを抱き上げると、開けた道を通り抜け、再び駆け始めた。
ホネスティも後に続いて付いていく。

『ここから近くで安全な場所、どこだ！？』

ホープは前方の敵を攻撃をジャンプや横移動で避けつつ、安全な場所の検討をしだした。

「とりあえず、私の自室へ！」

チェリーはホープにしがみつきながら言った。

「そうだな、安全なのはあそこだな！！」

ホープは場所の検討が付くと、目的地に向かって走り出した。

大切なものを賭けて

ビーイングキャッスル

突如見知らぬ大群に襲撃されたビーイングキャッスル。

リザードナイト&メイド達は職務を一時置き、敵の殲滅のため、武器を片手に戦っていた。だが敵の数はなかなか減らず、キリが無い状態だった。

主人であるチェリーを守るため、ホープはチェリーを抱きつつ城内を駆け回っていた。そして目的地であるチェリーの部屋の前に到着した。

「ふう、とりあえず一息つきますね。」

ホープは抱き上げていたチェリーを降ろし、ソファにもたれた。チェリーとホネスティも同様にイスに座った。

「それにしても、いったい何者なのでしょうか。 あの大群は。」

イスに座っていたホネスティはそう呟いた。

「目的がはっきりとまだわかっていませんから。 こちらからの手立てがうてませんね。」

チェリーは今までの敵の行動を思い出しつつ言った。

「でも、狙っているのはアリス様みたいだったな。」

ホープはもたれていたソファに座りなおし、チェリーに言った。

「そういえば高台の時も、廊下の時もそうだったわね。」

「私が狙いなのでしょうか。」

チェリーは言われた事を考えていた。

「大丈夫。 アリス様には手出しはさせないわ。」

「そうだ。俺達がしっかり守るからな。」

「ありがとう。二人とも。」

チェリーは自分を元気づける二人に言った。

ガシャン！

三人が話をしていると、部屋の右前方から物音がした。

そこには見知らぬ人影が。

「ウッフ、ようやく追い詰めたわ。」

「随分と手こずらせてもらったな。」

二人はそう言いつつチェリーの部屋に入ってきた。

ホープとホネスティはチェリーの前に素早く移動した。

「貴方達。いったいこの城に何の御用ですか？」

「随分と手荒い歓迎をしてくれたみたいだな。」

ホープとホネスティはそれぞれ相手に向かって言った。

「あら、獣がまだいたのね。」

「まったく廊下だけでもウジャウジャといたのにな。醜いやつらだ。」

二人は話を聞かず、それぞれで話をしていた。

「お二方。この城に何の御用ですか？」

チェリーは改めて二人に問いかけた。

「そろそろ返事をしますかな。」

「そうね。 私達は貴方に用があつてきたのよ。」

二人はチェリーを指差しつつ言った。

「私に？」

「ええ。 貴方の秘めざる不思議な力を、私達に提供していただけないかしら？」

相手の一人がチェリーに用件を言った。

「どのようなご用件なのでしょうか？」

「貴方の祈りの力で。 この世界を滅ぼすために使わせていただけないかしら？」

「そんな用件。 こちらが承諾すると思つてるのか？」

ホープは武器を構えつつ相手に言った。

「ウフフ。 そんなに簡単に済むようなら、私達はこんなことはしないわ。」

「ああ、だからこそその襲撃さ。」

「アリス。 貴方が早くこの用件をOKしなければ、貴方の大切な部下達の命を失うことになるのよ。」

敵はチェリーに向かって言った。

「何ですって！？」

「貴方が逃げていたおかげで、部下達は私たちの部下と戦い、多くが倒れたわ。」

「早くしないと、全員が命の灯火を消すことになるのさ。」

「みなさんの命が・・・」

チェリーは二人の言った事を気にし、表情を暗くしつつ言った。

「チェリー様！」

部屋で会話をしていた人たちは、敵の後方から聞こえた声の主を見た。

そこにはティザーが立っていた。

だが服は少々破けており、息が上がっていた。

「貴方、まだ生きていたの。」

「チェリー様、そのような言葉に惑わされてはいけません！」

ティザーは扉の柱に手をかけつつ、チェリーに言った。

「皆全員が生きています！ 全員が協力して負傷者は手当てをしております。 死んではおりません！」

「皆、生きているの？」

チェリーは暗かった顔を上げ、ティザーを見た。

「ハイ！」

「・・・その用件、お断りします。」

チェリーは二人に言った。

「たとえ私に手荒なことをしようとも、私は意見を変えません。 世界を滅ぼすなら、私がいな
いほうがマシですわ。 早々にお帰りいただきます。」

チェリーは2人からの用件を断り、そう言った。

「仕方ないわね。」

「ああ。 話がわかる方だと思ったんだがな。」

二人はそう言うと、手に剣を召還した。

「では」

「力づくでもそうさせてもらおう！！」

二人は猛ダッシュでチェリーの元へ突撃してきた。

だが

カンッ！

「おおっと。」

「私たちを忘れてもらっては困るわ。」

ホープとホネスティはそれぞれが持っていた武器で相手の一撃を受け止め、チェリーを守った。

そして攻撃を払い、敵とチェリーの間に入った。

「手荒なことを、俺達の主人にされては困るな。」

「そのような方々は、私達が直々に排除させていただきます。」

「逃げるなら、今のうちです。」

ティザーも三人の間に入り、言った。

「上等だわ。」

「獣が俺たちに勝てると思ってるのか。 行くぞ！」

「手出しはさせないわ！」

「かかって来い！」

「排除いたします！」

チェリーを賭けての大勝負が始まった。

見つけた物

ビーイングキャッスル

チェリーの部屋に突如押し寄せた親玉の敵二人。
その前方にチェリーを守るホープ達。
その後ろに立つチェリー。
世界の崩壊を賭けての、命を賭けての戦いが始まった。

「ハッ！」

敵は剣を構え、ホープに切りかかった。

「攻撃が浅いな！ ♪～ ♪！」

だがホープはその攻撃を避けつつラッパを吹き、雷で攻撃した。

「その言葉、そのまま返してやる。」

敵もホープの攻撃をジャンプで避け、部屋の一角に降り立った。

「雷獣か、なかなか手ごわいな。」

「すまないが、俺の大切な方々に手出しはさせねえぜ。」

ホープは持っていたラッパを持ち直し、攻撃態勢に。

「上等だ、楽しませてくれ！」

「行くぜ！」

「そーれ！」

「ハイッ！」

同様に同じ部屋で戦っているホネスティとメイド長。
相手はでかくとも、全力で戦っていた。

「フフ、汚い攻撃だわ。」

相手の敵は不適な笑みを浮かべたまま、二人の攻撃を受け止めた。

「攻撃はもっと優雅かつ美しい物じゃないと！」

敵はそう言うと、薔薇の花で攻撃をしてきた。

二人は攻撃を避けつつバックした。

避けられた薔薇は床に突き刺さった。

「部屋を汚くする装飾など、美しいものではございません。」

ティザーは持っていた箒で、床に刺さった薔薇の花をすべて払った。

「美しい始末をしつつ、相手を片付けるのが私達メイドの職務。 下賤なもので汚さないで頂きたいわ。」

「言わせておけばいろいろと、手加減しないわよ！」

三人も同等の力で相手を倒すべく戦っていた。

そんな戦いを前方に、チェリーは部屋の一角に立ってた。

『私のために、皆さんが戦っている。 私も何かしないと！』

チェリーは不意にそう思い、部屋に置いてあったピアノの元へ。

『皆さんの勝利を導く、祈りの音を！』

♪～♪♪～～ ♪～～♪～♪♪♪～

チェリーはピアノでの演奏を開始した。

『？ 力が。』

『傷が、治っていくわ。』

するとすぐに音楽の効果が現れ、3人に影響を出した。

「祈りの歌。」

「チェリー様が心配なさってるわ。」

「負けられないわ！」

三人はそれぞれが持っていた武器を握りなおし、相手の下へ突撃していった。

「あら、何か先ほどとは違うみたいね。」

「だが、そこまでさせるほど、こちらもお人よしでは無いんでな。」

敵の一人は、持っていたコードレスを取り出した。

「爆破！」

ポチッ

ドカドカドカドカドカン！！

すると事前に城に設置されていたダイナマイトが爆破され、城が揺れた。
しばらくすると、段々と部屋が傾いてきた。

「キャッ！」

チェリーは揺れた衝撃で座っていたイスから落ち、床に倒れた。
そして床を転がりテラスへと向かっていた。

「！ チェリー様！」

その行動を戦っていたティザーがチェリーの元へジャンプし、体を支えた。

「アリス様！」

「ご無事ですか！？」

ホープとホネスティも同様にチェリーの元へ。

「私は大丈夫よ。 皆。」

「ウフフ、そろそろ占め時かしらね。」

そんな様子を見ていた敵2人は、いつの間にかテラスへ移動していた。

「さて、まとまった所で止めを刺させていただくわ。」

「覚悟するんだな。」

二人は剣を構え、急斜面を降りつつチェリーの元へ向かってきた。
だが、

スパパンッ

敵とチェリーの間立っていたティザーが持っていた箒で剣を払い飛ばした。

「残念ですが、貴方達の思い通りにはさせません。 任務完了ですわ！！」

ティザーはそう言うと、2人を箒を渾身の力で振り、敵を払い飛ばした。

「縛られし獣の声！！ クレッシュェンド！！」

ホープは持っていたラッパで音を奏でると、電気が二人の事を押さえ付け縛った。

「どこか遠くへ、二度と来ないで！！」

ホネスティはそう言うと、持っていたスティックから花の竜巻を召還し、相手を吹き飛ばした。

「キャアアア—————！！！！」

「クソ—————ッ！！！！」

敵は遠くへ凄まじい勢いで飛ばされ、消えてしまった。

ドオオン！！

「キャア！！」

すると城が再び大きく揺れ、チェリーの事を支えていたテラスの柱が折れてしまい、チェリーは海へと引っ張られた。

壁となった床に手をかけるが、自分では上がれそうにない。

「アリス様！！」

「アリス様！！」

「チェリー様！！」

三人はチェリーの手を引っ張り、上がらせようとした。
だが城も傾いているため、なかなか力が入らず上がらない。
次第に部屋の傾きが増し、チェリーを引っ張っている三人も段々と前のめりになっていく。

「皆さん！ お願い！ 手を離して！！」

三人に引っ張られているチェリーは言った。

「出来ません！ そのようなこと！！」

「でも！ このままじゃ皆さんも海に落ちてしまうわ！」

チェリーは3人の状態を見つつ言った。

「たとえそうであっても、私たちは構わないわ！」

「そうだ！ いつでもアリス様の近くにいると決めたんだ！！」

ホープとホネスティも口をそろえて言った。

「皆さん、どうしてそこまで私に。。。」

チェリーは引っ張られたまま涙を流した。

涙は頬を伝って海へ落ちた。

「あの時の恩義もある。 でもそれ以上に！ アリス様といっしょにいたいのだ！」

「寂しい顔を二度とさせないためにも！ 出来る限りの事をするって決めたんだ！」

「職務以上に私自身も！ チェリー様と過ごす日々が好きなんです！！」

3人はそれぞれの理由を言った。

言葉に出来ない部分が多すぎるが、言えるだけの事を言った。

「皆さん。。。」

ガコンッ！

「！ 大変！！」

チェリーは自分を支えている3人の後ろを見つつ言った。
城の爆破で、壊れた城の屋根部分が纏まって4人目掛けて落ちてきたのだ。

「！ チッ 仕方ない！」

ホープは落ちてくる落下物を発見しそう言うと、ホネスティとティザーを抱え、海へと飛び出した。

ホネスティとティザーはホープに抱えられたまま、チェリーを引っ張り上げた。
ホープが3人を抱え、飛び出したおかげで瓦礫の下敷きにはならず済んだ。
だが今度は足場の無い海に落ちる危険に入った。

「このままじゃ海に落ちちゃうわ！！」

ホネスティは自分達を抱えているホープに言った。

「ここまでか！！」

ホープも半ば諦めかけていた。
その時。

ブワッ！！

「！ 何！？」

なんと、4人は急に吹いてきた風によって海には落ちず、逆に空へと向かって飛んでいた。

「風？」

「まさか！！」

ホープは風で離してしまったチェリーを見た。

するとチェリーはあの時同様に目を閉じく、両手を胸の前に合わせ、願いのポーズをとっていた。

「アリス様！！」

「皆さん、もう大丈夫ですよ。」

チェリーは閉じていた目を開け、三人を見た。

「皆様の強い願いと共に、私自身からの願いで助かりました。ありがとうございます。」

チェリーは風に乗ったまま三人にお礼を言った。

「そんな、私たち何も。」

「いいえ、皆さんは私に大切な物を下さりました。何も言わないで下さい。」

チェリーはホネスティの言うことを遮りそう言った。

「わかりました。何も言いません。」

「皆が助かった。それだけで十分だしな。」

ティザーとホープは言った。

チェリーはお辞儀をし、顔を上げつつ言った。

「さあ皆さん、お城へ帰りましょう！」

チェリーがそう言うと、城の傾いていた部分がすべて崩れ、安定した状態へなった。

4人はそんな外見の変わったお城へ帰っていった。

すると、お城周辺の雲が晴れ、久々の太陽が顔を出した。

その後、ケガをしてしまったリザードマン達の手当てをしつつ、お城の再建設へ取り掛かった。幸い厨房や生活に必要な部屋は無事だったため、城に済んでいた方々は何とか毎日を送っていた。

3人は立場や種族は違うものの、城での楽しい毎日を過ごしていたのだった。

—E P I S O D E E N D—